札幌市博物館活動センター 情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

No.70
February 2019

『お花畑』

エゾエンゴサクとカタクリとエゾリス

　透き通るような水色の花がエゾエンゴサク、赤紫の花がカタクリです。雪解けすぐの林の中は、こうした小さく可憐な山野草の花々がじゅうたんのように広がります。こうした様子から、まだ木々の葉が開かない明るい林の中で咲く植物を「春の妖精（スプリング・エフェメラル）」と呼んでいます。

撮影：安田 和雄

「博物館」を意味する英語Museumの語源であり、喜びを表すmuse（ギリシャ語）と通信や手紙を意味するLetter（英語）からMuseLetterと名付けました。

二つのオオヤチ

～記憶は記録になる～

文・写真／学芸員　山崎　真実

2018年秋、北区南あいの里付近で調査をしていると、散歩中のおじいさんから「何か珍しいものでもあるのかい？」と、声を掛けられました。田んぼや湿地に生える植物を探していると答えると、おじいさんは「湿地なんて今はないよ。ご苦労なことだね。」と言った後、昔の話を始めました。

おじいさんは開拓民の孫で、ずっとここに住んできたそうです。戦時中に小学生だったといいますから、おそらく80年余りにわたって、この地域の変化をつぶさに見てきた「生き証人」のような方でした。おじいさんによると、昔はあたり一帯がほとんど田んぼで、札幌駅のほうまで見渡せるくらい建物が無かったそうです。おじいさんの家も農家で田んぼを持っていましたが、その後、昭和の後半に国の政策もあって田んぼを畑に変えたそうです。その後また田んぼに戻したこともありましたが、数十年前に農業をやめ、田畑をそのままにしておいたところ、草ぼうぼうの荒れ地になったということでした。おじいさんは「畑の境界線に植えたヤチダモの木がこれだ」と言って、目の前の荒れ地の中で真っ直ぐ10mほどに伸びた木を指さしました。荒れ地の中で不自然に整列しているので植えたものであることはすぐに分かりました。ヤチダモはもともと湿地に自生する木で、湿っぽい土地に植えても育つことを農家の皆さんは知っていたのでしょう。

写真：ヤチダモの列 2018年

このお話を聞いて分かったことは、人間が耕さなくなって放置された土地は数十年たつと、一見して田畑だったことが全く分からないくらい変化するということでした。さらに、北区育ちの友人にこの話をすると、「その場所は、大野地（おおやち）の辺りだよね？」と聞き返されました。後日、大正～昭和の地図

写真：北区の旧大野地の一角にある水路周辺の変化

（左）南あいの里の住宅地ができ始めた2006年。水路には草が茂っていた。手前は草刈りされている。

（右）その後、水路に隣接する原野に建物ができ2014年には水路の片側に盛り土がかぶっていた。

を見ると、現在のJRあいの里教育大駅（旧釜谷臼駅）の南側に「大野地」という文字があるではないですか。調べた限りでは、昭和12年に大野地を含む周辺地域がまとめて拓北という名前に変更されていました。しかし、長年この地に住んでいる人々は今も大野地と呼んでいるのです。思いがけず話が連鎖し、厚別区の大谷地の他にもう一つのオオヤチがあったことを知ることができました。

どちらのオオヤチも昔は湿地でしたが、現在の2つのオオヤチの風景を比べると大きく違います。厚別区大谷地は市街地になり、北区の旧大野地とその周辺にはまだヨシやササが生い茂る風景があります。いつどんなふうに人間が田んぼや畑を作ったり、家を建てたりしてきたのかを調べると、今見えている植物の作り出す景色（植生）がどのようにできてきたのかを予想できます。その方法として、過去の写真や地域の郷土史のような書物から読み取る他に、地域の人々から昔の話を聞かせてもらうこともあります。そうした研究例を見ると、石狩平野の防風林にはヤチダモが植えられた例が多いことや、不自然に見えた地面の段差やくぼみは人が作った盛り土や水路だったこと、田んぼがいつ頃放置されたのかなど、過去から現在までの移り変わりがより正確に浮かび上がってきます。

写真：北区の旧大野地の水路周辺の変化 2018年

そうした面では、一人ひとりの脳内に収蔵されている記憶は貴重なデータと言えます。人の「記憶」を「記録」として誰もが知ることができるように残していくことで、後々の調査研究に活用できるデータとなるのです。

参考文献

塚田裕二 2003. 北海道石狩平野における幹線防風林の天然更新と植生構造の多様性. 東京都立大学2002年度卒業論文.

塚田裕二 2005. 北海道石狩平野に残存する森林の植生構造と人為攪乱の関係. 東京都立大学2004年度修士学位論文.

山田織江・冨士田裕子 2005.「拓北の森」の植生と土地利用変遷との関係. 北大植物園研究紀要第5号: 47-58.

札幌市教育員会編 1977. さっぽろ文庫1　札幌地名考.札幌市.

ホッとコラム

展示室につき
まつぼっくりに びっくり!?

○月×日　展示解説員　村中　光

昨年11月から展示している「まつぼっくりいろいろ」は、もうご覧になりましたか？

ハンズオン※展示コーナーの引き出しは開けることができ、世界・日本のまつぼっくりの大きさや形を観察することができます。

「世界一大きなまつぼっくり」や「世界一長いまつぼっくり」を見て「パイナップルみたい！」「バナナみたい！」などなど。想像力を働かせて観察するのは楽しいですね。

中には心配そうに「これも触ってもいいの……？」と聞いてくれる方もいますが、「もちろんOK！」です。

でも、強く握ったりするとまつぼっくりも壊れてしまうので、優しく触ってあげてくださいね。

楽しそうな子どもたちの様子を見ていると、パイナップルのように大きなまつぼっくりをずーっと触っているお友達がいます。パイナップルの皮みたいにチクチクなんでしょうか？

まだ見ていない方は、ぜひその大きさや感触を確かめに来てください。

※ハンズオンとは、英語で「hands on」と書き、来館者が実際に手（hand）で触れることで、より理解を深めることを目的とした展示方法のことです。

コレクションクエスト

ふだん公開していない
収蔵物を紹介します。
さぁ、標本の世界を冒険だ！

文・写真／学芸員　古沢　仁

博物館活動センターには、多くのレプリカが実物標本同様に重要な資料として保管されています。化石には一つとして同じものがありません。それらを大切に保管しつつ、研究や展示に用いるためにはレプリカが欠かせないのです。

写真：ヨルダニカイギュウ（SMAC 463）
下顎（かがく）の破損状況 2018年9月6日（左）と修復後（右）

昨年9月6日に発生した「胆振東部地震」では札幌にも被害がおよび、当センターで最も大きな被害を受けたのは「ヨルダニカイギュウ」でした（写真）。しかし、レプリカの利点は軽く、しかも修復が簡単なことにあります。ヨルダニカイギュウも数日後には無事、修復を終了し、山形県立博物館での貸し出し展示も終え、再びセンターで大切に保管されています。

File No.6 もっと「札幌の自然」を知って、楽しんでほしい!!

SMAC活動リポート

当センターで行われる、市民の自主的活動や、学校との連携など、様々な活動を紹介します。

博物館活動センターでは、市民の皆さんとともに札幌の自然の魅力や独自性を解明していくため、札幌にまつわる調査や研究、資料の収集・保存、そして、普及・交流事業を行っています。

普及・交流事業の1つに、年数回行う「野外体験会」があります。この体験会は、当センターの「古生物」「植物」担当の学芸員や専門家と一緒に、地誌や植物など「札幌の自然」を実際に見て・感じてもらうために実施しているものです。今年度もたくさんの皆さんに参加いただきました。

2018年に開催した植物の観察をする野外体験会

「体験会で伝えたこと、見つけたこと」をもっと広く知ってほしいと思い、2019年3月に博物館活動センターで開催する企画展「博物館活動日誌'18」にて、体験会当日の様子や発見したものを展示することにしました。最新の研究成果も紹介しますので、この機会にぜひ足をお運びください。

交通アクセス
■地下鉄南北線「澄川駅」北出口から徒歩約10分
■地下鉄南北線「南平岸駅」東出口から徒歩約14分

札幌市博物館活動センター infomation

入館料：無料
開館日：火曜～土曜　開館時間：10時～17時
休館日：日曜・月曜、祝日、年末年始（12月29日～1月3日）

ホームページアクセス
二次元コード

さっぽろ市
02-D05-18-1242
30-2-834

発 行　札幌市博物館活動センター
〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条15丁目1-6　Tel : 011-374-5002　Fax : 011-374-5014
Email : museum@city.sapporo.jp　ホームページ : http://www.city.sapporo.jp/museum/

VEGETABLE OIL INK　ミューズ・レターは、植物油インキおよび、環境省が定める「グリーン購入法」の適合紙を使用しています。